



毎日を「親を思う日」に

学校には色々なところから小冊子が届きます。今回はその小冊子に投稿されていた母の日」にまつわるある家庭での話を紹介します。(紹介文は概略です)

5月のある朝、食卓の花瓶にカーネーションが生けてありました。高1の娘さんが母への感謝の思いから学校の帰りに買って帰りました。このご両親もまた、遠方で暮らす両家の母親に花を贈っていました。しかし、今年は久しぶりに元気な顔を見せに行こうということで、家族みんなで会いに行きました。途中、小4の弟が「カーネーションを買いたい」と言い出して、貯めていた小遣いで小さな花束を買いました。家に着くと、もじもじしながら、その花束をおばあちゃんに差し出しました。「おばあちゃんにくれるの？」男の子は「今日は母の日だから……」「ありがとう。でも〇ちゃんのおばあちゃんだけどいいの?」「うん、おばあちゃんは『お父さんのお母さんだから』……」素敵な話ですね。『お父さんのお母さん』という言葉も素敵です。男の子の思いはこうでした。「僕を生んでくれたのはお父さんとお母さんだけど、その先のおじいちゃんやおばあちゃんがいなかったら僕は生まれてこなかった。だからお父さんを生んでくれたおばあちゃんに『母の日』にお花を買ったんだ」……

帰りの車中で父親が語ります。「孫から『お父さんのお母さんだから』なんて言われたら、うれしいだろうな。ただ……」「自分のことを振り返ってみたんだ。親にはたくさん苦勞や心配をかけてきたけれど、そういう親に対して、どれだけ『ありがとう』の気持ちを表してきただろうかと……『母の日』に贈り物をするのはいいことかもしれないけれど、『形だけの親孝行』になっていなかったかな、と……」

物語りはここで終わるのですが、最後のページに書かれていた言葉が、タイトルに示している、**毎日を「親を思う日」**という言葉です。

5月の第二日曜日を「母の日」とする習慣は、20世紀の初めころにアメリカで始まり、日本では戦後に定着したようです。5月5日の「こどもの日」について、法律では「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」と定められています。こどもの日は母に感謝する日でもあるのです。

母の日や父の日に、親にプレゼントを贈ったり、食事や旅行に招待したりする人もいるでしょう。しかし、「親への感謝の気持ち」は、そうした形でしか表せないものだろうか。と問いかけています。私たちは誰もが親から「いのち」を与えられ、この世に生を受けました。その「親」にも「親」があり、そのまた「親」にも「親」があります。

私たちの「いのち」は、先祖代々の「いのちのつながり」のなかで、脈々と伝えられてきたものです。しかし、人間が生きるということは、そうして与えられた「いのち」だけでなく、生育の過程では、必ず「どうかこの子が元気で育ち、社会の中でしっかりと生きていくことができるように」と祈りつつ、養い育ててくれた人がいたはず。その温かい「親心」を受けた結果、私たちの今があるのです。 裏へ続く

「身体髪膚(しんたいはっぷ)これを父母に受く、あへて毀傷(きしょう)せざるは孝の始めなり」(『孝経』) というように、自分自身を大切にすることは、親孝行の第一歩です。何より忘れてならないことは、「親に安心を与える」という心がけです。

親の心を思い、報告や相談をこまめにするのも一つの方法といえますが、親がすでに亡くなっている場合などでも、「親が安心するような生き方ができているかどうか」を日々自分自身に問い、生き方を正しくしていくことはできるのではないのでしょうか。

私たちは、毎日を「親を思う日」として、感謝の気持ちを忘れずに過ごしたいものです。それは、自分自身がしっかりと人生を歩むうえで大切なことであるのです。とこの小冊子は結んでいます。

私の両親はすでに亡くなっていて、親孝行はできませんが、この小冊子が問いかけているように「親が安心するような生き方ができているか」を日々自分自身に問いかけ、生き方を正しくしていかななくてはいけないなと思っているところです。

文責＝青少年育成センター指導員 大本